

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第五回）

あすかきよみはらのみや

「飛鳥浄御原宮」

（飛鳥宮跡・天武天皇即位）

おほきみ

1）大君は 神にしませば

あかごま

はらば

たい

赤駒の腹這ふ田居を 都

と成しつ

作者… 大將軍贈右大臣大伴郷の作

（卷十九—4260）

（解説）天皇は神でいらっしやるので、栗毛の馬も入り

込めば腹這うようになる深田の地でも、たちま

ちにりっぱな都に作り上げてしまった。

2) 大君は 神にしませば

みづとり

みぬま

水鳥の すだく水沼を

都と成しつ

・作者未だ詳らかならず

卷十九—4261

(解説) 天皇は神でいらっしやるから、水鳥の多数群がり騒ぐ

沼地も立派な都としてしま晴れた。

・この二首の歌の題詞には「壬申じんしんの乱らんの平定しづまりにし以後のちの歌二首」となっている。

・「壬申てんじてんのうの乱」は天智天皇てんじてんのう（三八代）没後の六七二年に天智天皇の後継者をめぐり天皇の弟の大海人皇子おおあまのおうじと息子・大友皇子おおとものおうじの戦いで古代史最大の内乱と言われている。

・壬申の乱の結果、大海人皇子の勝利に帰し、その年に皇子は飛鳥浄御原あすかきよみはらの宮を造営し、翌年（六七三）二月に即位し

天武天皇てんむてんのう（四〇代）となった。

・また、二首の最後には「右の件の二首は、天平勝宝四年二月二日に聞きて、即ち茲に載す。」と記されている。

・このことについては桜井満著・万葉集を知る事典」には「この二首の歌は、壬申の乱から八十年後の、天平勝宝四年（七五二）二月二日に大伴家持が聞いて記録した伝誦歌であると記される

・一首目の作者と伝えられる「大伴郷」は壬申の乱の功臣の一人であった大伴御行みゆきであったとの説があり、天皇とともに勝利をおさめ、晴れて新しい宮都を仰ぎ上の句では「大君は神にしませば」とうたって、天皇を神のごとき存在としてたたえ、下の句では「田居」や「水沼」を都にしたことを神ゆえの偉業としてうたっている。

・この歌は乱に勝利して即位した天武天皇への畏敬いけいと飛鳥浄御原宮ができあがったおりの祝ほぎ歌であろうとの説がある。

・飛鳥浄御原宮の宮跡は継続的な発掘調査の結果、奈良県明日香村役場周辺から北にある平坦部（水田跡）を中心部に飛鳥時代に重複して宮殿が造られている「飛鳥宮跡」の遺構の一つであるとみられている。

・「飛鳥宮跡」の遺構については出土された土器や木簡の年代などを根拠に「飛鳥岡本宮（舒明天皇）」「飛鳥板蓋宮いたがせのみや（皇極天皇）」「後飛鳥岡本宮（斉明天皇）」「飛鳥浄御原宮（天武・持統両天皇）」など、複数の宮が継続的に置かれていたとみられる。

・現在、飛鳥宮跡に復元されている石敷広場や大井戸跡は上層の「飛鳥浄御原宮跡」とみる説が有力視されている。

(参考文献)・清原和義著「万葉の歌」桜井満著「万葉集を知る事典」

・高木博著「万葉宮廷の哀歌」等

(写生地) 明日香村岡にある「飛鳥浄御原宮」跡地に復元された石敷き広場などの遺構と北西に見える万葉展望台として有名

な甘樫丘あまかしのおか(標高一四八メートル)等の周辺風景を描く。

(池田杏花)



